

自閉スペクトラム症の「こだわり」を生かした 「奈良教育大学鉄オタ倶楽部」の取り組み

富井奈菜実	奈良教育大学特別支援教育研究センター
大西貴子	神戸教育短期大学こども学科
中西陽	奈良教育大学学校教育講座
小松愛	奈良教育大学特別支援教育研究センター
根来秀樹	奈良教育大学大学院 (教職開発講座) / 奈良教育大学特別支援教育研究センター

A Program Focusing on Excessive Interest of Children with Autism Spectrum Disorder by *The Train GEEK Club* at Nara University of Education

TOMII Nanami

(Center for Special Needs Education, Nara University of Education)

ONISHI Takako

(Kobe College of Education, Department of Child Education)

NAKANISHI Yo

(Department of School Education, Nara University of Education)

KOMATSU Megumi

(Center for Special Needs Education, Nara University of Education)

NEGORO Hideki

(School of Professional Development in Education, Center for Special Needs Education, Nara University of Education)

Abstract

In this paper, in order to clarify importance of activities based on the interests of children with Autistic Spectrum Disorders, we examine the program and activity of “The Train GEEK Club at Nara University of Education”, which is composed of ASD children. The train GEEK Club program includes many different activities which are very unique. In the main program organized in accordance with their interests, the participants plan their activities, prepare and make their own presentations, by talking and sharing the knowledge related to trains and railways which are positioned as their “excessive interest”. It is found that the program has some significances, such as to pursue to their hobbies taking their advantage of knowledge of train, to get a sense of accomplishment through this activity, and to make close friends are able to talk and share their common hobbies. It is suggested that the activity is working for support of interpersonal relations and their leisure from the point of developmental perspective.

キーワード：自閉スペクトラム症, こだわり, 「鉄オタ」

**Key Words: Autism Spectrum Disorder,
Excessive Interest, Train GEEK**

1. はじめに

1.1. 自閉スペクトラム症の「こだわり」を生かした実践

自閉スペクトラム症（以下、ASD）⁽¹⁾の中核的な特徴に、限定された反復する様式の行動・興味・活動があげられる（高橋ら，2014）。臨床場面では「こだわり」とよばれるもので、本稿もこの表現を用いる。

「こだわり」は、田辺・田村（1997）が「教育実践や日常生活における養育のなかで多くの困難を惹起させ、これらの行動に対する指導に苦慮している現状がある」と指摘するように、保護者や実践者にとって、またASDのある子ども（以下、ASD児）自身にとって日常生活上の困難を生じさせることがある。こうしたことから「こだわり」はネガティブな行動として捉えられ「こだわり」を減少・消失させる対応がなされることが多い。

一方で、「こだわり」の対象を強い興味を示しているものと積極的に捉え直して生かす重要性や実践が報告されている。田辺・田村（1997）は、ひとりのASD児の「こだわり」の変化と実践について、4歳から18年間の縦断的研究をまとめている。ここでは、対象児が強い興味を示していた洗濯・アイロンがけが「コミュニケーションの対象がおとなから子どもへと拡大する」際の「原動力の一つ」となったことが示唆された。さらに洗濯・アイロンがけの活動が「行為の形式的な模倣から始まり、その過程でパターンの行為に陥りながらも、周りのおとなの評価を支えとして積み重ねていく中で、『意味』をもった活動として自己の内に位置付けるようになり、さらに、自分で自発的に創り出すといった活動へと変化」したとして、ASD児（者）が「こだわり」を媒介しながら人や物との関わりを豊かにしたと述べている。また荒木ら（2004）のASD児のふり遊びに注目した実践では、ASD児が強い興味を示すキャラクターを素材に「見立て遊び」に取り組んだところ、「自分にむけたふり遊びが相手に向けられたふり遊び」へ、「実際のキャラクターから粘土などでつくられた代用物でのふり遊び」へと展開し、さらには「ごっこ遊び」への兆しが見えはじめた事例が報告された。荒木らは「こだわり」は「社会的・対人的行動」と「『表象』を媒介としたふり遊び（象徴機能）とが結びつくことによって、新しい想像性（イメージネーションまたは対人的イメージネーション）となって発展していく可能性を内在させている」と述べる。ポーター（2011）のASDのあるわが子の「こだわり」である列車を土台にした家庭保育の縦断的な実践では、列車への「こだわり」を目的的に発展させることで列車関係の遊びや活動の幅が広がったこと、「機能的で反復的な遊びから想像的で自発的な遊びへの移行」がみられたこと、社会性の育ちにつながったことなどが報告された。

以上は個人を対象とした事例報告であるが、鉄道への

興味を取り入れた集団的な活動の実践として、平野ら（2010・2012）の事例がある。これはASD児への社会性発達の支援を目的とした放課後支援の取り組みで、鉄道に関するブログの運営、定例会の開催などが活動の内容である。報告から対象児が積極的に挨拶をしたり自らの発言に対する他者の関心の有無に注意を払うようになったこと（平野ら，2010）、撮影した列車の説明に加えて、撮影時の状況や心情を説明するようになったことや他者の発言に耳を傾ける姿が見られるようになったこと（平野ら，2012）が示され、ASD児の社会性の発達に積極的な影響を与えていることが示唆された。

これらの報告から「こだわり」を積極的に取り入れた実践は、ASD児の対人関係および活動・遊びの発達に、さらにはこれらが関連しあうことで発達全体に影響を与えるものであり、発達障害児に対する教育・支援において価値あるものとして評価できる。また「こだわり」を強い興味と捉え直すことの重要な意味は、子どもたちが楽しみながら、主体的に活動に取り組めることである。これはASD児の発達支援にとって欠かせない要素の一つであることから、積極的に実践に取り入れていくことが望まれる。

1.2. ASD児と「鉄道」

さて、ASD児の「こだわり」の一つとして「鉄道」があげられる。上述した先行研究でもテーマになっているように、鉄道は「こだわり」の代表格である。臨床現場でも鉄道に強い興味を示すASD児に多く出会う。具体的には、電車を見はじめたらいつまでも見ている、一日中プラレールで遊んでいる、ある区間の駅名を全て暗記している、電車のアナウンスの真似ができるなど、様々なエピソードを耳にする。また幼児期には、電車遊びばかりで友達と関わろうとしない、散歩先で電車を見つけると帰れなくなるなど、集団活動上の困難さとしての主訴が保護者や、保育者から述べられることもある。学童期では、一方的に鉄道の話をし続けて友達に嫌がられてしまう、誰とも趣味を共有・共感できなくて悲しいといった友人関係の困難さなども訴えられる。このように鉄道に「こだわり」をみせるASD児の知識量や熱量は秀でたものがあるが、これを発揮・発散しきれない、あるいはこれが生活上の困難につながってしまうということが少なくない。しかし、上述のようにASD児のもつ「こだわり」は彼らの発達にとって価値あるものである。奥住（2008）も「こだわりは障害特性なのだ」と固定的に見るのではなく、一つの発達の力と見なす視点も重要」と指摘する。これらを踏まえ、筆者らはASD児の鉄道への「こだわり」を生かした「奈良教育大学鉄オタ倶楽部（以下、鉄オタ倶楽部）」を発足させた。詳細は次の章で述べるが、鉄道に強い興味・関心

を抱くASD児の集団を作り活動するという取り組みで、余暇支援、対人面（社会性）の発達を支援することが活動の主たる目的である。この取り組みの特徴として、鉄道という特定の興味を共有する者の集まりであること、個人ではなく集団として活動すること、集団が小学生から高校生と幅広い年齢層のASD児によって構成されていることがあげられる。

本稿は、このような特徴をもつ鉄オタ倶楽部の活動がここに集うASD児にとって、どのような意義があるのかを明らかにすることを目的としている。あわせて余暇支援や対人面の発達支援としての有用性も検証する。

なお、本研究は奈良教育大学人を対象とする研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。研究や論文文化については保護者からの同意を得ている。

2. 鉄オタ倶楽部の概要

2.1. 参加メンバー

(1) スタッフ

奈良教育大学特別支援教育研究センターに所属する教職員が企画、運営を行った。

(2) 子ども

ASDがある小学生から高校生で、鉄道に対する強い興味をもつ子どもである。知的障害はないか、境界域である。2018年度は13名、2019年度は12名（追加1名、休会・退会2名）が参加登録した。概要は表1の通りである。

表1 参加児概要

ケース	性別	学年	学級	備考
A	男	小1	特別支援学級	
B	男	小2	通常学級	
C	男	小4	通常・通級指導教室	
D	男	小5	特別支援学級	
E	男	小6	通常学級	ADHD LD
F	男	小6	特別支援学級	ADHD
G	男	小6	通常学級	ADHD
H	男	中1	通常学級	
I	女	中1	通常学級	
J	男	中2	通常学級	
K	男	中3	特別支援学級	ADHD 2019年度休会
L	男	高1	通常学級	
M	男	高3	特別支援学校	2018年度未退会
N	男	小6	通常・通級指導教室	2019年度新規入会

注)学年の記載は2018年度時点。ただし、2019年度新規入会のNに関してのみ2019年度の学年を記載した。

参加児は奈良教育大学特別支援教育研究センターホームページおよび特別支援教育・発達障害支援関係機関へのチラシ配布によって募集し、その後抽選と面接を経て決定した。

(3) サポーター

子ども達と鉄道的话题を共有しながら支援を行う役割として「サポーター」を位置付けた。サポーターは発達障害児の教育や支援に関心があり鉄道の知識がある人を対象として特別支援教育・発達障害支援関係機関へチラシを配布して募集し、2018年度は6人、2019年度は8人（追加2人）が参加登録した。所属は大学生、学校教員、心理士、会社員等である。

2.2. 活動プログラム

(1) 活動期間・頻度

本取り組みは2018年度は2ヶ月に1回、2019年度は子どもたちの希望により1ヶ月に1回のペースで活動した。主に休日の2時間、奈良教育大学内で実施したほか、遠足や撮影など学外でも活動した。なお、本稿は2018年8月から2020年3月までの2つの年度にまたがる活動についての報告である。

(2) 活動内容

本取り組みの活動プログラムを表2に示す。

a. 発表会

本取り組みの構成として、定期的に発表の場を設定した。これは活動にある程度の枠組みをもたせることにより、必然的に子ども同士の関わりを生じさせるためである。またある目的に向かって仲間と話し合い、計画を立てるという学童期に経験すべき集団的活動を保障することも一つのねらいである。

成果発表会では、鉄オタのジャンルごとにグループを作り、自らの好きなことや仲間との活動記録をまとめて発表させた。2019年3月、2020年3月に発表会を設け、約半年かけて準備を進めた。発表時間は1グループ15分、個人は7～8分とした。

大回り乗車⁽²⁾は子どもたちの希望により実現した企画で、2019年9月に実施された。これに先立ち、2019年8月に実施した大回り乗車選手権は、JR奈良駅を出発地、JR王寺駅を到着地とし、その間のルートを各グループで話し合っけてプレゼンテーションさせるというものである。子どもたちは年齢を考慮した4グループに分けられ、約3ヶ月かけて準備を進めた。選手権では子ども、保護者、サポーター、スタッフによる投票が行われ、得票数の最も多かったグループの案が大回り乗車のルートに選ばれた。

表2 活動プログラム

活動月	活動内容
2018年度	8月 定例会：自己紹介 / サポーターによる発表モデル
	10月 定例会：成果発表会のグループ、テーマ決め
	11月 発表準備：Nゲージ（鉄道関連施設での撮影。以下同様。）
	12月 定例会：発表準備
	2月 発表準備：Nゲージ・撮り鉄（撮影。以下同様。）
	2月 定例会：発表準備
	3月 遠足：鉄道技術研修センター
	3月 発表会：第1回「奈良教育大学鉄オタ倶楽部」成果発表会
2019年度	5月 定例会：成果発表会振り返り・保護者聞き取り
	6月 定例会：大回り乗車選手権のグループ、テーマ決め / サポーターによる発表モデル
	7月 定例会：発表準備
	8月 発表会：大回り乗車選手権
	9月 遠足：大回り乗車
	11月 定例会：成果発表会のグループ、テーマ決め
	12月 発表準備：Nゲージ
	12月 定例会：発表準備
	1月 定例会：発表準備
	2月 発表準備：撮り鉄・前面展望（撮影）
	3月 発表会：第2回「奈良教育大学鉄オタ倶楽部」成果発表会

b. 定例会

定例会では上述した発表の準備がグループごとに進められた。具体的にはパワーポイントを用いた発表資料の作成、写真および動画の撮影や編集等を行った。各グループにスタッフとサポーターを配置し、知識の補足や進行補助などの支援を行った。なお、電車の撮影等、学外での活動も行った（表2：発表準備）

c. 遠足

遠足は2回実施された。

1回目は、名古屋市にある鉄道技術研修センターを訪れた（2019年3月）。鉄道関連の建設会社が技術研修を行う施設で、施設見学もできるようになっている。施設内には実物同様の線路、ホーム、踏切などがあり、子どもたちは普段であれば立ち入ることができないエリアに入って見学したり、非常ボタンを押したりするなどの体験をした。施設主催の研修会にも参加し、鉄道建設について学ぶことができた。

大回り乗車（2019年9月実施）は、8月に実施した大回り乗車選手権にて決定したルートで大回り乗車に出かけた。子どもたちは電車の写真や動画の撮影に加え、駅構内にある立ち食いそばを食べるなども自ら企画し、仲間との時間を楽しんだ。

3. 成果発表会

成果発表会の準備の過程（定例会・発表準備）でみられた事例を取り上げて分析する。分析の対象は、スタッフである筆者（以下、S）が携わっていたチームの活動レポートである。なお、活動レポートはスタッフである教員らが活動直後に投稿したfacebookの記事（facebook上に開設した鉄オタ倶楽部のページに記載したものであり、全体公開設定のものと同メンバー限定公開設定のものがある）、活動中の写真・動画、子どもたちの発表資料などをもとに作成された。

3.1. 成果発表会のチーム

第1回（2019年3月）と第2回（2020年3月）の発表会の概要を表3に示す。これらのチームは子どもたちが興味のあるジャンルや希望するジャンルを出しあうことで形成された。

「撮り鉄」、「プラレール」、「音鉄」、「鉄道クイズ」など、鉄オタ初心者であってもある程度想像がつくと思われる、いわゆる“王道”のジャンルから、「Nゲージ」、「前面展望」、「鉄道PV」、「鉄道MMD」のような“マニアック”なジャンルまで様々なチームが作られた。

表3 成果発表会の概要

	チーム (ジャンル)	内容	メンバー
第一回	撮り鉄/チーム	発表準備で撮影した写真の紹介	G、I、J
	撮り鉄/ソロ	自身で撮りためた写真の紹介	K
	ブラレール	鉄オタ倶楽部メンバーと一緒に組み立てたブラレールの走行動画撮影	A
	音鉄	関東圏の発着メロディーをピアノ演奏し、録音した動画の視聴	I、L
	Nゲージ	Nゲージの前面展望 (Nゲージの先頭車両に小型カメラを搭載し専用レールにて走行) の動画撮影	C、D、E、F、H、J
	鉄道クイズ	難読駅名のクイズ出題	B
第二回	撮り鉄	撮影会で撮影した写真の紹介	C、D、E、F、H、I
	音鉄	発着メロディークイズ、走行音講座 (ソロ発表)	B、F、L、N
	Nゲージ	Nゲージの前面展望の動画撮影	A、G、J、N (ヘルプ: H、L)
	鉄道クイズ	難読駅名や鉄道知識のクイズ出題	B、G
	前面展望	発表準備で撮影した前面展望 (先頭車両からの眺め) の動画撮影	C、D、E、H
	鉄道PV	鉄道のプロモーションビデオ作成	H、J
	鉄道MMD	アニメーション製作ソフトで作成した動画の作成	L

3.2. 「撮り鉄/チーム」 (2018年度活動)

(1) 概要

メンバーは、G (男・小6), I (女・中1), J (男・中2) の3名である。発表会では車両などを撮影した写真を紹介することになった。すでに多くの写真を持っているが、仲間と一緒に撮影に行きたいという希望が出され、定例会とは別日に撮影に出かけた。当日は近鉄竹田駅に集合して撮影した後、JR京都駅に移動して撮影を続けた。Iの母親、サポーター a, Sが同伴した。

(2) 子どもたちの様子 (2019.2)

a. 時刻表の準備 — Gの事例—

撮影に先立ち、Gは京都駅発着の電車の時刻表を自作し、人数分を印刷して用意していた (図1)。時刻表には「〇〇線」という線区名、発着時刻、方面が記載されており、線区名ごとにまとめられていた。IとJに渡すのは照れ臭いようで、まずはSに自作してきた時刻表を見せにきた。SがIとJに声をかけて仲介したことにより、手渡すことができた。

事前準備として、撮影可能である車両を網羅的に把握しようとした点、既存の時刻表を印刷するのではなく自作したという点にGの「こだわり」があらわれている。撮影への高い期待ともいえ、さらにはそのモチベーションによって、細やかに計画する力が発揮されていた。また自分だけ好きなものを撮影して楽しむのではなく、仲間とも共有する、あるいは共有したいという意識が見受けられる。



図1 Gが作成した時刻表

b. 撮影の対象

一口に「鉄道の撮影」と言っても、その中身 (撮影の対象) はバラエティに富んでいた。3人に共通してみられたのは、主に車両の前面 (後面) を写真に収めるというものであった。この時、「〇〇系や!」と車両形式に注目し、特に珍しい車両や現象 (ある車両が並列されている等) に出会う度に喜んでいて、大人が理解できないでいると、その都度解説してくれることもあった。個の特徴がみられた事例として、Gはある車外電光掲示板 (車両の側面にある、行き先方面を知らせる掲示板) に注目していた。Gは別のホームから当該車両を目にすると一目散にホームを移動し、掲示板を撮影して「これ、LEDが変わったから撮りたかったんですよ」とSに伝えた (図2)。



図2 光掲示板 (LED) を撮影 (一部加工)

また期間限定のラッピング車両 (キャラクターなどの塗装が施されているもの) を撮影したいというリクエストを事前にSに伝え、運行スケジュールも調べていた。ほかに、Jは電車内にある車両を製造したメーカーのロゴや車両番号を撮影していた (図3)。



図3 Jがメーカーロゴを撮影しているところ

子どもたちが普段から鉄道を追究している様子、鉄道に対する豊富な知識を

もっていることがわかる。車両そのものの知識はもちろん、細部の設備や製造元などその対象は多種多様であった。またこれらの情報を収集する力量もあることがわかった。

c. 仲間との撮影

撮影は集団での活動を意識させるために個人行動はしない（単独でホームを移動しない）ことのみルールづけし、あとは自由に撮影できるようにした。実際、子どもたちは場を共有しつつも、撮りたいものを撮りたいだけ撮るといった様子であった。Gは持参した時刻表に基づきながら撮影をしていたが、突如目にした車両めがけて走り出すこともあった（この場合、Sが他の子どもたちに移動の声をかけた）。しかしまたGはIやJが撮りたい車両を希望するとこれに応じることもあり、柔軟にプラン変更していた。Jは普段から一人で撮影に出かけることが多く、時々単独で撮影することがあった。撮影には慣れているので見守りは必要なかったが、集団を意識してもらうためにその場から離れないよう言葉かけを行った。Iは基本的にGやJについて行った先で撮影するという様子であった。

普段、子どもたちは一人もしくは家族と撮影に出かけており、今回のような集団での撮影は初めてであった。各自興味のある対象は様々だったが、それぞれが出した希望に反対するといったことは一切なかった。また撮影の最中に移動を余儀無くされた場面であってもすぐに“切り替え”しており、行った先でも不満な様子や退屈する姿も見せずに撮影を再開していた。撮影後には“一人の撮影も楽しいけど、みんなで行く撮影も楽しかった”、保護者より“普段は集合写真を嫌がるので、一緒に撮影していて驚いた”などの感想が聞かれた。

共通の興味というのは、相手が好きなものを想像できるという点に強みがある。「あの子はあれがみたいのだろう」「あれが好きなのだろうか」ということが推測でき、また自分にもそれがわかる（共感できる）からこそ、相手の意見を尊重できるのではないだろうか。

3.3. 「音鉄」（2018年度活動）

（1）概要

メンバーは、I（女・中1）とL（男・高1）の2名である。「鉄オタ倶楽部」発足時、2人とも「音鉄」であること、『鉄のバイエル—鉄道発車メロディ楽譜集JR東日本編—』（松澤、2008）を持っていることを紹介しており、このグループができた。発表は楽譜集から選んだ数曲を含む発車メロディーを大学内のピアノで演奏し、ビデオカメラで撮影（録音）することになった。

（2）発表会の準備（2019.2）

撮影は各自別室で行なった。Iは人前で演奏することに対して強い抵抗を感じていたようで、「見られるのが嫌」、「一人で練習させてほしい」とSに伝えてきたため、一人で一通り練習させた。しばらくすると落ち着いたようでも撮影を開始した。時々別室からLの演奏が聞こえると、それに対してうまく演奏できていないことを不安に感じているようであった。また自身の姿を撮影されることにも抵抗があったようで、「絶対に手元だけしか映さないで」と要求していた。多くの不安を抱えながらの演奏・撮影となったが、Sの励ましを受けながらなんとか予定していた曲を録音することができた。Lは普段から演奏していること、「耳コピ」（聞いた曲を楽譜を見ずに再現すること）が得意なことから順調に撮影が進んだ。またLは発表会に向けて、撮影した映像の編集を担うこととなった。Iの分の編集も快く引き受け、映像データをコピーして持ち帰り、自宅でテロップや駅の紹介などを含めた発表映像を作成してくれた（図4）。

駅の発車メロディーは一般的にも馴染みがあり、それほど珍しいものではない。しかし、彼らには楽譜を入手して演奏するという点に「こだわり」があらわれている。集団活動について、LはIの編集

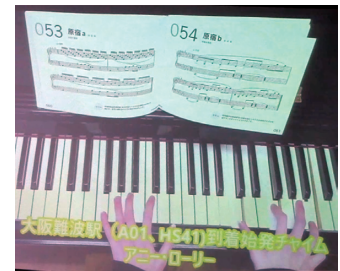


図4 「音鉄」発表映像

作業をしてほしいという要求に快く応じていた。Iはそれに対して感謝の意を示し、出来上がった作品を見て満足そうであった。できないところは他者に任せる、得意分野で他者を援助するといった共同作業が行われた場面であった。Lについては、Lの保護者から「好きなこと以外はだいたい人がやってくれるのを待っている方なのですが、今回のプレゼンでは、他人の分も手伝ったり、譲ったりする場面もありました」というコメントが寄せられた。好きなことを共有できる仲間関係の中だからこそ、役に立ちたい、力量を発揮したいと思えたのだろう。

3.4. 「音鉄」（2019年度活動）

（1）概要

メンバーは、B（男・小3）、F（男・中1）、L（男・高2）、N（男・小6）の4名である。全員が他のグループをメインに活動していたことにより、まとまって作業する時間がなくソロでの発表となった。ここではNの事例を取り上げる。

(2) 発表会の準備と本番 (2020. 1～3)

Nは2019年度から加入した新メンバーで、今回が初めての発表会であった。よって準備から本番に至るまで常に緊張していた。特に発表時間が何分なのか、自身の発表が何分くらいになりそうなのかを1分単位で気にしており、スタッフ数人に繰り返し質問していた。

発表内容ついて、はじめは鉄道の走行音(発車時のモーター音など)をクイズにして参加者に答えてもらうことを希望していた。しかし、発表会参加者の大半はいわゆる“素人”であり、鉄道に関する知識がないことから、内容を変更してもらうことにした。鉄道の走行音をテーマにしたいということに変わりはなかったため、サポーターらとも相談しながら走行音の解説を行うことにした。しかし、解説となるともっている知識ではカバーできないようで不安げな表情を見せていた。サポーターが助けてくれるからと励みますが、あまり効果がないようであった。(以上は2020.1)

翌月(2020.2)の定例会では、開始直後から発表準備ができていないことに焦りが見られ、「どうしよう」とSに話しかけてきた。Sの知識では対応しきれないことから、サポーターbに専属での支援をお願いし、準備を進めた。サポーターbはNが紹介したい音(車両)を聞き出し、その解説文を考案した。これをNが文字起こし、発表原稿を完成させた。内容は、車両やエンジンのメーカーによる走行音や体感の違いを解説して聞かせる(音源はyoutubeから検索)ものであった。発表資料(パワーポイント)はSとともに作成した(図5)。Nは準備が整ったことに心から安心し、満足できたようで「あーできたー」と何度も口にした。またiPadでマリオ(任天堂ゲームに登場するキャラクター)が跳んでいる写真を探してSに見せ「僕、今こういう気持ちです!」と伝えてきた。発表当日(2020.3)は常時原稿用紙を握りしめ、繰り返し読み上げて練習を重ねていた。本番では大きく息を吸って一文一文ゆっくりと読み上げ、無事に成功させた。

Nがテーマとした鉄道の走行音は、一般的にはあまり気にされるようなものではなく、マニアックな興味とあってよい。ただし、音の違いには技術の発展やメーカーの違いなどが影響しており、興味深い分野である。実際に参加者からは「面白かった」、「興味をもった」というような感想も聞かれた。またN自身もはじめは知識がなく不安も抱えていたが、サポーターと話し合う中で知識も深まっていったことで、より満足できたのではない

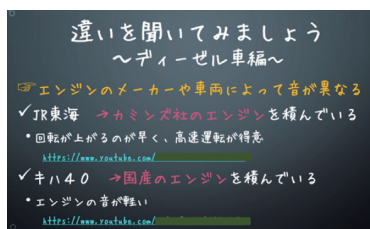


図5 Nの発表資料(一部加工)

だろうか。“好き”というだけでなく、“究める”ということの喜びを感じられたエピソードであった。またこれが実現できたのはサポーターの存在が大きい。鉄道の専門家としての助言はこの取り組みの重要な要素である。

3.5. 「鉄道クイズ」(2018/2019年度活動)

(1) 概要

2018年度はB(男・小2)がソロで活動、2019年度はB(男・小3)とG(男・中1)がグループで活動した。クイズを考えて資料(パワーポイント)を作成し、出題するという内容であった。

(2) 子どもたちの様子

a. クイズの考案と出題の工夫 — Bの事例—

1年目の2018年度、Bは迷いなく難読駅名をテーマにしたクイズを出題したいと希望した。2年目もクイズの継続を希望し、「音鉄」のグループも所属したが、こどもでもクイズを出題していた。主な興味の対象は難読駅名とクイズである。

2018年度はソロ活動だった。低学年ということもあり、Bにはサポーターcが専属でついて支援した。主な作業はパワーポイントを使った発表資料の作成であったが、難読駅名を探すなかで新たな発見を楽しんでいた。最終的には16問の問題を作成した。問題はレベル1「簡単」、レベル2「普通」、レベル3「難問」、レベル4「超げきむず」と難易度別に構成されていた。またレベル「?」として、「ところ変われば読み方変わる?」というテーマの問題や、「超げきむず」の中に実は漢字の読みがそのまま答えになる、いわゆる「ひっかけ問題」も取り入れるなどし、参加者を楽しませる工夫を凝らしていた(図6)。発表会当日(2019.3)に実施した事前リハーサルでは、問題と同時に解答も提示してしまうなど苦労していたが、本番では順調に進行し、見事に会場を沸かせていた。Bは難易度の高い問題に「鉄オタ」の仲間が答えてくれることに喜びを感じているようであった。他の子どもたちにも好評で、来年はクイズを出題したいという声が多く聞かれた。



図6 難読駅名クイズ ひっかけ問題

2019年度はGとペアで活動した。準備初期、2人が出題したい問題を持ち寄り、互いの問題をみながら問題を選択する機会を設けた。Bははじめ難読駅名一本で進めるつもりでいたが、Gが多様な問題を用意しているのを見て影響を受け、難読駅名を含む「鉄道クイズ」に幅

を広げた。難読駅名については路線図を見てGやサポーターと相談しながら問題を作成していた。新たなシリーズとして、日本一短い駅名、日本一長い駅名、世界一長い駅名というシリーズ、ある路線の駅名を答えさせる（()に入る駅名は? など）シリーズが追加された。実際に訪れた駅もあり、その時の写真も提示していた。

Bの「こだわり」の対象は難読駅名に関する知識やその駅の写真収集である。すでに持っている知識も大人顔負けであったが、路線図を見ながらさらに究めている様子から熱中度の高さがうかがえる。さらに難易度に差をつけて問題を構成したり、「ひっかけ問題」を取り入れたり企画力の高さも発揮されていた。

対人関係について、BはGの用意した問題に憧れを抱き、自らの問題に磨きをかけていた。その中でGとの友情が築かれ、Bは定例会に来るたびに「Gはまだきてない?」、「Gとこれがしたい」とGに会うことを非常に楽しみにしていた。鉄道への興味を共有することによって友情が深まり、またその中でさらに鉄道への知識が深まるという実態が明らかになった。

b. クイズの考案と出題の工夫 — Gの事例—

Gは2018年度発表会でのBの発表に影響を受け、2019年度は「鉄道クイズ」をメインのグループに選んだ。よほど楽しみにしていたのか、準備初回の定例会にはすでに問題数問を作成して持参した（2019.12）。Gの問題の内容はバラエティに富んでおり、どのテーマに絞っていくかが課題となった。また自主的に制限時間を確認し、問題数も調整していた。最終的には、時事問題（ダイヤ改正の日時、引退した車両など）、駅名当て（駅に関する情報をヒントとして提示し答えさせる）、歴史（電車にゆかりのある歴史上人物など）といったジャンルの問題を12問作成した。Gは2018年度では「撮り鉄」グループに所属し、ここで初めてパワーポイントを使って資料を作成したが、すぐに上達し「鉄道クイズ」では問題文の背景に自身で撮りためていた写真や、webで見つけた写真などを大量に貼り付け工夫を凝らしていた。また1枚目のスライドにはリード文も記載し（図7）、参加者にわかりやすい発表を心がけていた。



図7 スライドにリード文を記載

Gの鉄道への興味は時事問題や歴史などの問題からも

わかるように、多種多様である。それぞれの知識も豊富で、まさに「鉄オタ」である。常日頃鉄道について究めていることがよくわかる。またGは写真を多く取り入れるなど、「聞く人」に配慮した工夫を多く取り入れていた。また発表の際リード文を使用することで、参加者に見通しをもたせていたと考えられる。ASD児にはコミュニケーションの課題があるとされるが、Gの事例は他者の視点をよく意識している現れである。自分の好きなものを知ってもらいたい、共有してほしいという動機がその原動力になったと考えられる。

4. 1年の振り返り

2019年5月の定例会で、第1回成果発表会および1年の振り返りを行なった。1年の振り返りは、質問を記載した紙を子どもたちに配布し記入させる方法で実施した。子どもたちはスタッフやサポーターに質問したり、助言を受けながら回答を進めた。回答後には質問紙をもとに意見交流を行なった。本稿では質問紙で得られた回答の内容を検討する。

質問は(1)友達はできましたか? (2)同じ趣味を持つ仲間との活動はひと味違いますか? どんなふうに? (3)一番楽しかったことはどんなことですか? なぜですか? (4)うまくいかなかったことや、困ったことはありましたか、どんなことでしたか? (5)次の1年間の活動への希望 (6)次年度の目標の6問であった。なお質問(6)は質問紙に記載されておらず、実施の際にSが口頭で追加した質問である。口頭による追加であったため、この質問に回答しなかった子どももいた。回答は各質問の下に空欄を設け、自由に答えられるようにした。2018年度メンバーの子ども13名全員が回答した。

表4は子どもたちの回答内容を分析してカテゴリーに分け、まとめたものである。

質問1：友達はできましたか?

13名中10名が“できた”と回答しており、大半の子どもたちがこの活動を通して友人関係を築いたことがわかる。“おおよそできた”と回答したのはGとMの2名だった。Gは参加率も高く交流の機会は多かったといえるが、「撮り鉄」グループの発表準備によく集中していたことから、友人との交流よりも鉄道を究めることが活動の目的になっていたと考えられる。Mと「残念ながらできませんでした」と回答したKは参加回数が少なかったため、交流の機会そのものが少なかったと考えられる。

質問2：同じ趣味を持つ仲間との活動はひと味違いますか? どんなふうに?

“違う”と回答したのは13名中10名であった。回答内

容は、鉄道について共有できる仲間がいる（【共有・仲間】）、知識が深まったり、刺激を受けたりした（【知識・刺激】）、活動そのものが楽しかった（【活動】）に分けられた。

【共有・仲間】について、「すっきりする（C）」、「学校とかに少しでも話せる人がいなかったからこういうのがあってうれしい（E）」など、鉄道について他者と共有したいと願いつつもできなかったこと、鉄オタ倶楽部で趣味を共有できたり、聞いてもらえる仲間ができたことへの喜びや手応えを読み取ることができる。

【知識・刺激】について、「自分はまだまだだと感じました（G）」や「刺激を受けた（M）」のように、自分よりもレベルの高い友人に影響を受けていることがわかった。普段の生活の中では誰よりもよく知っているという状況であることが予想されるが、鉄オタ倶楽部の子どもたちと出会い、「上には上がいる」ことに驚きがあったのだと考えられる。また「自分の知らないこととかたくさん教えてくれた（L）」のように知識が深まったことや、友人が教えてくれたことへの喜びについても語られた。

【活動】については、「みんなで遠足に行くことができた（I）」と、普段できない友人との経験に満足していることがわかった。次に“変わらない”と答えたのは13名中2名であった。Hの「普段も周りにいるのであまり変わらない」という回答から、普段から趣味を共有できる友人がいる子どもにとっては、それと同じような活動の場になっていることがわかった。Aは無回答であったが、その理由は小学1年生ということもあり、回答が困難であったためだと考えられる。

質問3：一番楽しかったことはどんなことですか？

なぜですか？

遠足（【遠足】）、各グループでの活動（【Nゲージ】、【撮り鉄】、【鉄道クイズ】、【音鉄】）、【その他】に分けられた。

【遠足】は、「初めて名鉄に乗れたから（F）」や「普段できない貴重な体験ができたため（K）」と普段できない経験ができたことが楽しかったようである。

【Nゲージ】は、「Nゲージをはしらせたこと（C）」、「Nゲージを見れたこと（D）」、「ポボンデッタへの下見（E）」、「友人とポポに行ったこと（友人とNゲージを楽しめたので）（H）」と発表準備で訪れた鉄道関連施設での経験をあげていた。

【撮り鉄】は、「京都駅でJR西日本を見れたのが楽しかったです。なぜなら、接近メロディーの音色が良かったり、目的の車両がどんどんとれていくのが楽しかったからです。（G）」と、発表準備のためにでかけた撮影をあげていた。

いずれも、友人とともに出かけられたこと、出かけた先で好きな活動に取り組めたことが楽しかったようであ

る。なお、「Nゲージ」と「撮り鉄」の両グループに所属していたIは「撮り鉄とNゲージの発表」、「撮り鉄」グループに所属していたKは「105系の発表」と回答しており、発表に手応えを感じていたことがわかる。

【鉄道クイズ】について、Bは「クイズを考えること」と回答した。発表会では盛り上がりを見せたが、Bにとってはクイズを考える過程が一番楽しかったようである。

【音鉄】では、「たくさんの駅メロを弾くことが楽しかった。聞いたことのある駅メロを弾けたのが楽しかった。（I）」と回答しており、ここでも発表準備の過程を楽しんでいることがわかる。Iについては前章で述べたように、Lとの演奏技術の差を気にして不安を高める場面もあったが、弾いてみたいという願いが叶ったことに喜びを感じていることがわかった。

【その他】のIの回答「意見を出し合うこと」については、具体的な内容については不明である。

質問4：うまくいかなかったことや、困ったことはありましたか？ どんなことでしたか？

13名中9名が「ない」と回答、1名が無回答であった。

「ある」と回答があった3名は、発表の準備の過程での苦労を述べていた（【発表準備】）。「西日本ごう雨や運動会で2回つぶれて発びょうまでの時間が短くなったのが少し困りました。（G）」、「何を弾くかを相談するのに時間がかかった（I）」と、準備の時間が足りないことや準備に時間を要したことについての回答と、「Nゲージの撮影で脱線した所（J）」といった失敗談の回答があった。

質問5：次の1年間の活動への希望

13名中9名が希望を述べた。3名は「ない」という回答であった。希望の内容は、遠足やお出かけに行きたい（【遠足・お出かけ】）、発表会に関すること（【発表会】）、レベルをあげたい（【レベルアップ】）、活動継続（【活動継続】）、仲間に対しての要望（【仲間への要望】）に分けられた。

【遠足・お出かけ】については、「京都鉄道博物館（B）」、「京阪京津線に乗りたい（F）」、「次の遠足は本州の西側へ行ってみたいです（G）」と、全員が具体的な施設、線区名、エリアをあげていた。

【発表会】については、「クイズをやりたい（B）」、「電車のさつえい（D）」、「ゲーム内の鉄道について（H）」、「走行音の6択クイズを出して難しくしたい。Nゲージで東や西だけでなくもっと色々な曲を使ってもっと色々な車両を走らせたい。…改造したNゲージを紹介したい。（J）」と発表テーマや内容に関する希望が述べられた。Jに関しては多くの希望が出された。多くはより良い発表を目指すものや、新しいジャンルへの要望で、

Jにとって「鉄オタ倶楽部」の活動が非常に有意義なものになっていることが読み取れる。ほかに「発表会では好きな友達や先生をもっとさそいたい。芸能人もさそいたい。(J)」、「もっと人々に鉄道について興味を持たせられるような発表がしたい(I)」と、他者に言及するものもあった。いずれもより多くの人と鉄道の趣味を共感したい願いがこめられているといえる。さらにIの希望は、他者に楽しんでもらえるよう発表に磨きをかけたという自身への願いである。

【レベルアップ】は、「さらにパワーアップしたい、全員でとりてつものしゅぎょうしたい(E)」という希望で、よりレベルをあげていきたいという意欲が表れている。また「全員で」という言葉から、仲間と一緒に活動したいと希望していることがわかる。

【活動継続】は、Kの「受験期間は活動できないけれどまた活動したい」という回答である。Kは2019年度は受験に向けて活動休止を決めていたが、再度活動したいと希望していることがわかった。

【仲間への要望】は、Lの「前回の発表で音鉄などほかの部門に自分の見つけた新しい鉄道の楽しみ方も取り入れてほしいです」というものである。LはMMD(MikuMikuDance)というアニメーション制作ソフトを用いて鉄道動画を作成することが好きで、「音鉄」の発表内で作品を紹介していた。具体的には、架空の電車や

駅を創作し、音楽などを挿入したアニメーションである。「自分の見つけた新しい鉄道の楽しみ方」というのはこれを指しており、このような技術やソフトをもっているのはLだけであるため、他の子どもたちにも共有してほしいという要望だと考えられる。

質問6：次年度の目標

13名中6名が回答し、7名は無回答であった。回答内容は、発表内容に関すること(【発表内容】)、レベルをあげたい(【レベルアップ】)、活動内容に関すること(【活動】)に分けられた。

【発表内容】は、「難しい駅名を考える(クイズ)(A)」、「もっといっぱいクイズをしたい(B)」、「クイズはなるべく難しくめで、何択か出して行きたいです。Nゲージは協力して、頑張っ行って行きたいです(初めてなので)。(G)」など、次の発表に向けた具体的なグループをあげて目標を立てていることがわかった。

【レベルアップ】では、「前年よりすごいこと(C)」、「鉄道をいっぱい覚える(D)」といった回答で、今よりもさらに鉄道を究めていきたいと考えていることがわかる。

【活動】は、「もっと大回りとかしたい(E)」というもので、目標というよりは活動への希望であったが、「鉄オタ倶楽部」で幅広く活動していきたいという願いを読み取ることができる。

表4 「一年の振り返り」 回答内容

(1) 友だちとはできましたか？	はい(A)、できた(B)、はい(C)、できます(D)、はい(E)、できた(F)、はい(H)、できた(I)、たくさんできた(J) できなかった おおよそできた おおよそできなかった 残念なからできませんでした(K)
(2) 同じ趣味を持つ仲間との活動はひと味違いますか？ どのように？	違う：共有・仲間 違う：知識・刺激 違う：活動 変わらない 無回答
(3) 一番楽しかったことはどんなことですか？ なぜですか？	えんそく(A)、名鉄への遠足、初めて名鉄に乗れたから(バンスバ原色乗ったこと)(F)、名古屋遠足で普段見れないところもみれてよかった(L)、鉄道設備の見学、普段できない貴重な体験ができたため。(K) Nゲージを見せられたこと(C)、Nゲージを見られたこと(D)、オボテアツタへの下見、みんなでもり上がった(E)、友人とボクに行ってきた(友人とNゲージを築きあげた)(H)、撮り鉄とNゲージの発表(I) 京都駅でR西日本を見られたのが楽しかったです。なぜなら、接近メロディーの音色が良かったり、目的の車両がどんなとどれいくのが楽しかったからです。(G)、撮り鉄とNゲージの発表(I)、105系の発表(K) Nゲージを築きあげること(B) たくさんの駅メロを弾くことが楽しかった。聞いたことのある駅メロを弾けたのが楽しかった。(I) 意見を出し合うこと(M)
(4) うまくいかなかったことや、困ったことはありましたか？ どんなことでしたか？	ない(A)、ない(C)、ない(D)、ない(E)、ない(H)、ない(K)、ない(L)、ない(M) 西日本ごう前や運動会で2回ぶつかわれて発音するまでの時間が短くなったのが少し困りました。(G)、何を弾くかを相談するのに時間がかかった(I)、Nゲージの撮影で記録した所(I)
(5) 次の1年間の活動への希望	無回答 (B)
遠足・おでかけ	遠足に行きたい、京都鉄道博物館(B)、京都京津線に乗りたいたい(F)、次の遠足は本州の西側へ行ってみたいです(G)
発表会	Nゲージをやりたい(B)、電車のさつえい(D)、ゲーム内の鉄道について(H)、もっと人々に鉄道について興味を持たせられるような発表がしたい(I) 走行音の6段Nゲージを出して難しうしたい、Nゲージで東や西だけではない色々な曲を弾くのもっと色々な車両を走らせたい、去年使った曲以外で、撮り鉄のブログで東京の色々な車両を紹介したり、鉄道PVを紹介したい、鉄道音を作ったりしたい(音楽に指定した鉄道会社のある曲を歌う)。 駅を築きあげたい、東京撮り鉄、ウツ電通主催もやりたい、改造したNゲージを紹介したい、発表会では好きな英語や先生をもっとさそいたい、芸能人もさそいたい。(I)
レベルアップ	さらにバリエーションアップしたい、全員でとりつろぎようしたい(E)
活動継続	受験期間は活動できないけれどまた活動したい(K)
仲間への要望	前回の発表で音数などほかの部門に自分の見つけた新しい鉄道の楽しさ方も取り入れてほしいです(L) ない(A)、ない(C)、ない(M)
(6) 次年度の目標	
発表内容	楽しい駅名を考える(Nゲージ)(A)、もっといっぱいNゲージをした(E)、 とり鉄は、和田峠、加古川、姫路、福知山方面に行ってみたいです。Nゲージはなるべく細くして、河原か出して行きたいです。Nゲージは協力して、頑張って行きたいです(初めてなので)。(G)
レベルアップ	前年よりすべいこと(O)、鉄道をいっぱい築きたい(D)
活動	もっと大回りとかしたい(E)
無回答	(F)、(H)、(I)、(J)、(K)、(L)、(M)

5. 鉄オタ倶楽部の意義

5.1. 「こだわり」の実態

子どもたちの鉄道に対する「こだわり」の実態として、「撮り鉄」グループのLEDやメーカーロゴ、「音鉄」グループの発車メロディーの楽譜所持や走行音、「クイズ」グループの難読駅名や時事など、マニアックなものに強い興味と幅広い知識をもっていることがわかった。またこれらの情報は日常生活上ではほとんど知り得ないもので、常日頃から鉄道という趣味を追究していることがよくわかる。またこれらの知識を活かした時刻表の自作や、クイズの考案など、発想の豊かさや企画力の高さも興味深い。

5.2. 子どもたちにとっての意義

上述したような「こだわり」をもつ子どもたちにとって、これを存分に追究できたことが最も重要な意義である。子どもたちは毎回の活動日を非常に楽しみにしており、学校行事や習い事などがある場合を除いて積極的に出席し、生き生きと活動に参加していた。1年の振り返り(表4)では、“うれしかった”、“楽しかった”、“よかった”という肯定的な言葉も多く、鉄オタ倶楽部での活動に手応えを得ていることがわかる。一番楽しかったこと(質問3)では、Nゲージを走らせたことや撮影会、普段できない新たな経験として遠足などが挙げられ、活動そのものを楽しんでいることがわかった。他に、鉄オタ倶楽部の一味違うところ(質問2)について、他児から刺激を受けたことや、知識が深まったことが挙げられた。Nの事例では、準備の過程で知識が深まったことへの喜びがみてとれた。このようにただ好きなことを楽しむだけでなく、これを究めていく楽しさや刺激を得られる場になっていたこともわかった。活動中には「鉄道の話できるの最高や!」、「今日は鉄分多めや!」などの発言も聞かれ、彼らの望む活動が一定実現されたとと言えるであろう。また以上はASD児の余暇支援としての機能を果たしていると考えられる。

発表会に関しては1年の振り返りにおいて、一番楽しかったこと(質問3)に準備の過程や発表をあげる子どもが多く、発表会をやり遂げた喜びや達成感を得ていることがわかった。「音鉄」グループのIやNのように自分の技量や知識の不足に不安を抱えつつも、最後にはやり遂げられたことに喜びを得ているケースもあった。それぞれの持つ知識や技能を発揮できた達成感、不安がありながらもやり遂げた達成感は、子どもたちの自信に繋がるものである。自己肯定感が低下しやすいASD児にとって、自信に結びつく経験が保障されたことは意義のあることと言って良い。

以上のような趣味の追究やそれに伴う達成感に加え、

仲間存在に価値を感じていることもわかった。大半が友達ができたと実感しており(質問1)、鉄オタ倶楽部の一味違うところ(質問2)や、一番楽しかったこと(質問3)として、話や気が合うことが嬉しかったこと、その仲間と一緒に様々な経験ができたことなどが述べられていた。「撮り鉄」グループでの撮影会でも、仲間とともに過ごした時間が楽しかったことがよくわかる。Gの自作した時刻表を配布した事例からは、他者と共有したい、あるいは共有しようとする思いも表れていた。また特に興味深いものとして、質問2の「すっきりする(C)」、「学校とかに少しでも話せる人がいなかったからこういうのがあってうれしい(E)」という発言があった。「こだわり」の実態で述べたことからわかるように、子どもたちの興味は限定的であり、現状では普段学校などで接する同年代の友人と共有できないことがわかる。しかし同時に、自分の好きなことを他者と共有したいという願いも読み取ることができ、さらに鉄オタ倶楽部でその思いが充足されていることがわかる。限られた趣味を共有する集団は、否定されないという安心感が前提にあり、この心地よさが他者との繋がりを願うASD児にとって重要な点であり、鉄オタ倶楽部の役割である。

最後にそれぞれの期待や願いがさらに膨らんだことも重要である。次の1年間の活動への希望(質問5)では、具体的に行きたい場所、より良い発表、新しいジャンルへの挑戦、他者との共有など多くの願いがこめられていた。またGの「みんなの方が知識量やそうぞう、写真量に差があって、自分はまだまだだと感じました」(質問2)という発言からは、仲間に懂れる思いを読み取ることができる。活動を十分に楽しんだり、仲間と関わる中で、「～したい」、「こんな自分になりたい」という願いがさらに膨らんだと考えられる。言い換えれば、自らの好きなことを思い切り楽しむこと、これを共有しながら他者と関わることで、新たな願いを生み出す土台となる。

5.3. ASD児教育としての意義

ASD児教育としての意義を鉄オタ倶楽部の活動の主たる目的である余暇支援と対人面の発達支援に触れながら考察し、本取り組みを評価しておく。

余暇支援については先に述べた通りで、限定された趣味をもつ子どもたちは生き生きとしながら趣味を追究することができており、本取り組みの成果である。

対人面の発達支援については、上述のとおり趣味を共有・共感し合い、ともに活動できる仲間関係が作られたことが一つの意義である。このほか、ASD児の教育として興味深いことの一つは、共同作業や助け合いが見られた点である。本稿では「音鉄」グループのLの事例をあげたが、共同作業がうまれた背景として、小学生から高校生までの縦割りの集団が設定されていたことも重要

である。またLの保護者の発言にもあるように、普段は“やってもらう”側、助けてもらう側に回ることが多いが、ここでは一人一人が各ジャンルを極めるエキスパートであり、互いに頼り、頼られる存在となることができる。それぞれの役割があり、またこれを自然と誇れる場面が設定された取り組みであった。こうした集団の中で子どもたちは素直に助けを求める経験や、頼られる喜びを実感を得ることでできたのであろう。

またASD児は他者の心情を推測することに困難があるとされるが、子どもたちは発表会を通じて他者の視点をよく意識していた。「鉄道クイズ」グループでは、参加者を楽しませるために問題の出し方や難易度を工夫していたし、Nはマニアックな走行音の情報をサポーターとともにわかりやすく解説しようと努力していた。Iは「もっと人々に鉄道について興味を持たせられるような発表がしたい」と述べていた。好きなことを十分に発揮させつつも、「他者」を意識させる枠組み（発表会）をもたせたことによって、相手にどう見えるか、どう伝わるかによく向き合っていたと思う。

以上で重要なことは、他者の心情を推測させるための訓練として捉えるのではなく、好きなものに熱中できる環境の中であれば、ASD児は自然と他者を意識できると捉えることである。確かに本取り組みの中でも、自分の話をし続けたり、発表内容がマニアック過ぎて参加者に伝わらないような場面も多々見られた。しかし、上述したような工夫を凝らしたり、発表会後の参加者の感想文や、スタッフ・サポーターからの意見を聞いて「もっとわかりやすく説明すればよかった」、「来年は〇〇について解説したい」など、積極的に改善しようとしていた。これは、子どもたちが主体的に取り組むなかで自然と生じる他者への配慮である。ただし、ASDに起因する様々な困難によって主体的に活動できる経験が少なくなりやすいことが現実問題としてはあり、対応が必要となってくる。本取り組みの成果から、子どもたちが主体的に活動できる環境と、好意的に“聞いてもらえる”他者の存在が、ASD児の社会性の発達支援の要であると言えるのであろう。

最後に本取り組みの評価として、「鉄道」をテーマにしたことと、サポーターを位置付けたことの意義を述べる。鉄道のテーマに関しては、「鉄オタ」そのものに対する評価にもなるが、実に多様な楽しみ方があることが魅力である。発表会のジャンルの多様さや撮影会での着眼点など、子どもたちの興味は多種多様であり、交流するなかでさらに深まりや広がりを見せていた。またスタッフや発表会参加者など、聞く側も興味深く楽しめるものであった。このような鉄道の趣味としての多様性が、子どもたちを夢中にさせ、本取り組みを活気づけたのであろう。

またこうした活動が実現したのは、「鉄オタ」であるサポーターの存在が非常に大きい。活動を企画・運営するのは筆者らスタッフであったが、鉄道に関しては“素人”であるために、子どもたちの趣味の探求を支えるには限界があった。ここを補強してくれたのがサポーターであり、鉄オタ倶楽部に欠かせない役割を担っていた。例えば、発表会前にはパワーポイントのお手本を示してくれたり、Nの事例のように子どもの不安を汲み取りつつ、共に準備を進めてくれた。子どもたちの限定された幅広い知識と同等の、あるいはそれ以上の知識を持つ“大人”の存在、“大人”との関わりが子どもたちの主体的な活動を支えるものであった。また“大人の本気”に触れ、憧れる子どももいた。憧れの存在というのもまた、子どもたちの主体性を引き出す鍵を握っている。

5.4. 今後の実践的課題

大半の子どもたちは鉄オタ倶楽部の活動を楽しんでいたが、Iの事例で示された他者との比較による自信の喪失については配慮が必要であると考えられた。結果的にはIは納得のいく演奏や発表ができたようだが、この事例のように普段自信のある分野をさらに楽しみたいと望んで参加したにも関わらず、エキスパートである仲間とのレベルの違いに自信を失ってしまうことは今後起こり得るし、自信を損ねてしまつては本末転倒である。Iの場合は、別のグループでパワーポイントの編集を担当し、これに手応えを得ていたようで、次の発表会でもパワーポイントを作りたいと希望していた。このようにグループ内で自らの役割を持たせ、きちんと達成できるように支援していくことが重要だと考えられる。

また鉄オタ倶楽部の取り組みをさらに発展させるための課題として、集団的活動の方向性の検討が必要であると考えた。この2年間の取り組みでは、仲間関係や活動を定着させることを狙い、スタッフが活動の方向性を定め、指導してきた経緯がある。友達を作ったり、計画を立てたりすることが苦手なASD児にとっては必要なことであり、現に土台が作られたが、今後は子どもたちの手で自治的に活動や発表会を作り上げるような仕掛けも必要となる。楠(2009)は、発達的に9、10歳頃から集団的自己が誕生し、「大人の手を借りずに自分たちの手でやりとげたい」という意欲が湧くことから、様々な行事をできるだけ子どもたち自身の手で企画・運営していく機会を保障していくことが大切だと述べている。この集団においては、年齢的にはこの時期を超えていてもASDに起因する様々な困難から自治的な活動を十分に経験してこなかった子どもも少なくないと考えられる。また年齢が低い子どもたちの自治を支えるためには年齢の高い子どもの存在が必要となる。今後、年齢幅が広い集団であることを生かした集団的自治活動の保障を検討

していきたい。

6. まとめ

ASDの「こだわり」を生かした実践や、そのテーマとして「鉄道」を扱ったものはこれまでもあったが、本取り組みは個人の興味の追求と集団活動の双方を促すという点で独自性がある。その意義については、これまでに述べた通りである。個人と集団の関連について、本稿においては、個人の興味が存分に追求できることが活動への主体性を保障するものとなり、これが他者との共同作業への原動力になったと考えられる。また、集団活動のなかで他者に刺激されたり、憧れたりすることにより、個人の鉄道への熱量や“なりたい自分”への期待をさらに高めることが明らかになった。

また共通の趣味をもつ仲間に加え、発表会の参加者という、目の前にいない第三者を設定した点にも独自性がある。通常の場合、学童期半ば頃に他者の視点にたつて物事を捉えたり、他者の視点を意識して自己を捉えたりするようになる。目の前にいない他者に対しては、書き言葉を用いて交流しようとする（田中, 1987）。しかしASD児の場合は、これらの発達につまずきが見られる。本取り組みにおいて、子どもたちは好きなことを楽しむという自然な状況のなかで、必然的に参加者という他者の視点を強く意識することができた。また、発表会後には参加者への理解をさらに促したいという感想も出ており、本取り組みを通して他者の視点への意識がさらに高まったと考えられる。

以上のような特徴をもつ本取り組みの活動や経験は、子どもたちの自己形成にも影響するものと考えられる。今後、検討していきたい。

註

- (1) 本稿は、引用文献も含め、DSM-5に準じてASD（自閉スペクトラム症）の用語を使用する。
- (2) 大回り乗車とは、JR旅客営業規則に定められた「大都市近郊区間内のみをご利用の場合の特例：大都市近郊区間のみを使う場合は、実際に乗った経路とは関係なく、始終着駅の最短経路の運賃でよい」を用いて、安く、長時間電車に乗る方法である。（鉄オタ倶楽部サポーター解説資料より）。

文献

- 荒木穂積・井上洋平・立田幸代子・前田明日香・森光彩（2004）高機能自閉症・アスペルガー障害児の発達と教育的対応ふり遊びの分析から。障害者問題研究, 32(2), pp.43-50.
- 奥住秀之（2008）どうして？教えて！自閉症の理解。全国障害者問題研究会出版部。
- 楠凡之（2009）7～9, 10歳頃の発達の質的転換期 白石正久・白石恵理子編 教育と保育のための発達診断。全国障害者問題研究会出版部, pp.159-177.
- 高橋三郎・大野裕監訳（2014）DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル。医学書院。
- 田中昌人（1987）人間発達の理論。青木書店。
- 田辺正友・田村浩子（1997）自閉症児における行動特徴の発達変容——一人の自閉症児の4歳から18年間の縦断的研究——。奈良教育大学紀要, 46(1), pp.313-321.
- 平野幹雄・鈴木徹・野口和人（2010）主体的な活動としての放課後実践を通じた高機能自閉症およびアスペルガー症候群の子どもへの社会性発達支援の試み。宮城教育大学特別支援教育総合研究センター研究紀要, 5, pp.22-30.
- 平野幹雄・鈴木徹・長谷川武弘・野口和人（2012）高機能自閉症およびアスペルガー症候群の子どもを対象とした、放課後支援を通じた社会性発達支援に関する実践的研究。宮城教育大学特別支援教育総合研究センター研究紀要, 7, pp.69-76.
- ポーター倫子（2011）高機能自閉症児のこだわりを生かす保育実践—プロジェクト・アプローチを手がかりに—。保育学研究49(1), pp.73-84.
- 松澤健（2008）鉄のバイエル—鉄道発車メロディ楽譜集JR東日本編一、ダイヤモンド社。